

氏名	成澤 明		
学位の種類	博士（医学）		
学位記番号	博甲第 8670 号		
学位授与年月	平成 30年 3月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	通所介護サービスを利用している地域在住高齢者の 孤独感に関する研究		
主査	筑波大学教授	医学博士	高橋 祥友
副査	筑波大学教授	医学博士	青沼 和隆
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	山岸 良匡
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	森田 展彰

論文の内容の要旨

成澤明氏の博士学位論文は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者における孤独感をもたらす要因について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

通所介護サービスを利用している地域在住高齢者を対象に、孤独感の実態と孤独感に関連する要因を明らかにすることを目的として、著者は本研究を立案した。そして、予備的検討として孤独感が生理学的指標に及ぼす影響と孤独感を緩和する支援方法についても検討している。

（方法）

本研究では、孤独感の定義を孤独感尺度得点が高いことに加え、ソーシャルネットワークとソーシャルサポート尺度得点が低い高齢者を孤独感がある状態と、著者は定義する。調査対象者は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者 200 名であり、男性 53 名（26.5%）、女性 147 名（73.5%）であった。対象者は、通所介護サービスを利用している地域在住高齢者とし、質問紙を用いた聞き取り調査と生理学的指標（血圧・心拍・自律神経機能）の測定を著者は実施している。

孤独感との関連を明らかにする要因は、文献検討において 2012-2016 年に孤独感との関連が検討されていた項目で、研究結果が一致していない性別、年齢、家族形態、社会参加、住宅形態、居住地域とした。孤独感と各要因について χ^2 検定を行い、各項目間との関連の有意性を確認し、孤独感の有無を従属変数とする多重ロジスティック回帰分析（変数減少法：尤度比）を著者は行っている。また、予備的検討として孤独感の生理学的指標に及ぼす影響を検討するために、孤独感の有無を説明変数、生理学的指標を従属変数とするロジスティック回帰分析を実施している。さらに、地域在住高齢者に対するコラージュの効果を検証し、孤独感を緩和する支援方法を検討するために事例検討も著者は行っている。

(結果)

改訂版 UCLA 孤独感尺度 (第 3 版) 得点の平均は 38.44 ± 9.43 点であるとの結果を著者は得ている。孤独感尺度得点が高いことに加え、ソーシャルネットワークとソーシャルサポート尺度得点が高い「孤独感あり群」は 45 名 (22.6%)、「孤独感なし群」は 154 名 (77.4%) であったことを著者は報告している。

多重ロジスティック回帰分析の結果、社会参加 (オッズ比 0.167, 95%CI; 0.04-0.74, $p=0.018$)、住宅形態 (オッズ比 0.379, 95%CI; 0.18-0.79, $p=0.009$) が孤独感に有意な関連があったと著者は報告している。

生理学的指標については、孤独感と血圧・心拍との関連では有意差のある項目は認められないと著者は述べている。孤独感と自律神経機能との関連では、「孤独感あり群」で自律神経機能の回復力 (Δ CCV (HF)) 異常の有無と有意な関連が認められたが、寄与率や判別正解率から他の要因の影響が大きく、生理学的指標への影響は認められなかった。孤独感を緩和する支援方法としてのコラーージュの効果は、気持ちの改善は認めたものの、孤独感、生理学的指標に対する効果は認められなかったと、著者は報告する。

(考察)

社会参加の有無および住宅形態が、通所介護サービスを利用している高齢者の孤独感に関連することが明らかになり、高齢者の孤独感を把握する上で重要な要因となることが示唆されたと、著者は述べる。

孤独感の及ぼす影響については、孤独感が生理学的指標に影響を及ぼすことを仮説として予備的に検討したが、寄与率や判別正解率などから他の要因の影響が考えられ、今回の調査では、生理学的指標への孤独感の影響はほとんどなかったと考える。しかし、孤独感が生理学的指標に及ぼす影響を明らかにした研究蓄積は少なく、検証までには至っていないことから、今後も調査対象者数を増やし、孤独感の生理学的指標に及ぼす影響を検討していく必要があると、著者は考察している。

孤独感を緩和するための支援方法の検討については、事例検討となったため、コラーージュの孤独感に対する効果は検証するまでには至らなかった。コラーージュを生理学的指標により客観的に評価した研究蓄積は少なく、今後も調査対象者を増やすとともに、コラーージュ制作の回数についても検討を重ねながら、地域在住高齢者の孤独感を緩和する支援方法を検討していく必要があると著者は考えている。

審査の結果の要旨

(批評)

人生の最終発達段階である高齢期において孤独感がきわめて重要な役割を果たすことは、従来の研究や理論が繰り返し強調してきた点であるものの、実証的にこの点について検討した調査はほとんどなかった。本論文は、地域在住の通所介護サービス利用中の高齢者を対象として、孤独感の果たす役割とそれに関連する要因について検討した意義ある研究である。調査対象が限られていることや方法論に若干の問題点が指摘されたものの、高齢者の心の健康について論を深めていくうえで、研究の重要な出発点とみなされる論文である。著者は先行研究と本研究との関連、本研究を計画した目的、研究結果の臨床への応用などに関して、明快に論理を展開し、審査委員の質問に対しても論理的に答えることができた。

平成 30 年 3 月 6 日、学位審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士 (医学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。